

## 令和5年度 第3回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和5年8月29日（火）13時30分～15時30分
- 2 場 所 岐阜市庁舎 6階 6-1 大会議室
- 3 出席者 柴橋市長、水川教育長、武藤委員、横山委員、伊藤委員、加藤委員、岡本委員
- 4 招聘者 棚園 正一 氏（漫画家、イラストレーター）
- 5 傍聴者 一般6名、報道関係者0名
- 6 次 第 （1）市長あいさつ  
（2）協議  
「一人ひとりに寄り添った教育機会の確保」
- 7 議 事

（13時30分開会）

---

### （1） 市長あいさつ

### （2） 協議

#### ① 事務局説明

（資料1 「誰もが安心して学べる学校・居場所づくり」）

#### ② 招聘者講演（棚園氏）

（資料2 「学校へ行けなかった僕の毎日が宝物と思えるまで。」）

### ③ 意見交換

#### ○武藤委員

棚園さんの講演をお聴きして、学校を重い呪縛のように感じている子どもたちが一定数いるのだということを改めて感じた。こうあらなければならない、失敗が許されず、完璧を求めるような空気がまだ学校を強く支配しているのではないか。失敗は成功の基ということわざもあるとおり、失敗することは人生においてとても必要なことである。学校の中に、トライ&エラーとそこから立ち直す経験を許容する空気がなければ、そこで挫折し、自己肯定感を失う子どもが増えるのだと思う。先日、先般開催された全国高等学校野球選手権大会で準優勝した仙台育英学園高等学校の須江監督の話を伺う機会に恵まれた。須江監督は、人は成功からは学べないもので、本当に学べるのは自分で失敗したことからだとおっしゃっていた。

個性や多様性を認め合いましょうという言葉をよく聞くが、認めるということは、失敗することも含めて認めるということだと思う。これからは、正解のない問題に立ち向かっていかなければならない世の中になると言われている。正解を探しに行くというよりは、やってみて失敗し、そこから次の一步につながるものを学びとるという気持ちや姿勢を醸成していくことが学校の基本姿勢としてあるべきではないかと思う。

事務局に伺いたいのが、「ここタン」の「聞いてほしい」ボタンの利用状況について、ボタンを押した子どもに話を聞いたところ、実は深刻な内容ではなかったというものも一定数含まれるのではないかと思うが、実際にそうした案件はどのくらいあるのか。また、そういった案件に対してどのように対応しているのか。

#### ○坂井学校安全支援課長

現時点では把握できていない。

## ○武藤委員

「聞いてほしい」ボタンを押した子どもに話を聞いたところ、昨日の夕飯がおいしかったという話を先生に聞いてほしかったから押した、というケースがあり、学校がそれに対して、そういうときに押すものではないといったようなことを言ったという話を、以前、教育委員会定例会で話した。元々想定していた使われ方ではないのだが、こうした子どもの伝えたい、聞いてほしいという気持ちを否定することは、本末転倒だと思う。「聞いてほしい」ボタンで本当のSOSをタッチしたいのであれば、こうした発信を否定的に捉えてはいけない。

先ほどの失敗を許さない空気の話につながるような気もするが、新しい施策や取組が始まると、どうしても想定から外れたものは間違っていると捉えがちである。こうした施策や取組についても、うまくいかないことは多々あると思うが、それをどうこう言うのではなく、そこから何を学び、どうしていくのかというところを大事にするという姿勢で、我々も様々な政策や取組を検討すべきだと思う。

## ○棚園氏

本日、草潤中学校と三輪中学校を見学させていただいた。草潤中学校のことは、ニュース等で拝見しており、以前から関心があったのだが、不登校の子が行く学校はもはや学校ではないのか、全く学校に通えなかった当時の自分は果たして通えたのだろうかと思っていた。しかし、実際に見学してみて、ここなら当時の自分でも通ってみたいと思えたかもしれない、と思った。それは、私が通っていた予備校に近い雰囲気だったからだ。大学のように、自分で受ける授業を決め、行くか行かないかも自由であった。草潤中学校は、それを中学校の制度内で実現していると感じた。そして、学校が苦手なドロップアウトした子どもたちが楽しそうに過ごしていることがとても魅力的だった。きっと、ここで楽しそうに過ごしている子どもたちは、学校に通えなかった自分も捨てたものではない、こうした生き方もあるのだと、肯定的に捉えられていると思う。私自身もそうだったが、仲間

ができるということはとても大事なことである。学校に行っていなかったという点では同じなのだが、きっと内面は全く違う人が集まっているはずであり、私はそういった同じ境遇にありながら内面が全く異なる仲間とのコミュニケーションを通じて、多くのことを学ぶことができた。それは、とても素晴らしいことだと思う。

近年、愛知県においても、いくつかの自治体で校内フリースペースが設置されており、見学させていただいたことがある。見学前は、登下校時や学校内でクラスメートに会わないか心配で、当時の私であれば絶対に通わないだろうと思っていた。しかし、実際にそこに通っている子どもたち同士はとても仲がよさそうであり、それがとても印象的であった。こうした子どもたちにとって、人間関係ができることは、非常に重要なことだと思う。そして、こうしたフリースペースを担当する方は、学校も選択肢の一つだと考えている方がよいと思う。そこにどのような大人がいるかも非常に大事な要素の一つだ。学校が好きでない子もおり、こうした考えを持つ大人がいる場所は、多くの子どもたちの居場所になると思う。

## ○加藤委員

不登校は、病気などではない。ただ、学校に合わない、合わなくてしんどくなったということを表現するだけの言葉である。柵園さんの講演にあった不登校のきっかけは、柵園さんにとってはSOSを出した自分を認めてもらえなかった経験になってしまっただろうし、それを見ていた周りの子にとっても、大人に対してSOSを出してはいけないという教育になってしまったのではないか。また、不登校初期の頃の親に顔向けできない様子や、自分はこの世に存在してはいけないといった自責の気持ちは、不登校になった多くの子が通る道だ。そして、親との確執も必ず出てくるものである。今を生きられる、あるいは楽しめる家庭はよいのだが、そうした家庭は一部である。自責の気持ちが強く、家族関係が悪化した結果、引きこもりになる場合もある。そういう意味では、不登校も選択肢の一

つだと捉えることは大事なことであるものの、やはり基本的には不登校の子どもたちを生まない学校づくりが大事であると思う。

そのためには、学校での不登校の引き金となるような出来事を減らしていく取組が必要である。学校を子どもが適応障害を起こしにくい場所にしなければならない。私が外来で診ている子どもたちからは、学校は理不尽なことが多く、困っても助けてくれない不安なところだという声もあがっている。理不尽なことというのは、例えば、休み時間はずなのに休む時間が削られるといった、言っていることとやっていることが違うことである。こうしたものが、いつの間にかルールになっており、このルールに合わせられない子、発達特性が強い子がこぼれおちていく構造になっているように感じる。学校が安心できる場所であるためには、こうした見えないルールが本当に大事なことから、見直す必要があると思う。社会は理不尽なことにあふれており、それに折り合いをつける力は必要なものであるが、子どもころからそのための訓練をする必要が本当にあるのだろうか。私は、受け入れられるだけの度量を備えた大人になってからでもよいと思う。子どもころからこうした訓練を行っていると、自ら考えずに言われたとおりに動くようになってしまう。考える力を身につけさせるためにも、理不尽さを受け入れる訓練はやらない方がよいと思う。私は、不登校は駄目だとは全然思っていない。不登校から学ぶことも多い。しかし、不登校という傷を抱えた子どもたちがそこから這い出すためには、相当なエネルギーが必要になる。自尊心が回復せず、3、40歳になっている方も私は見ている。学校は、子どもが最初に出会う社会である。その社会が寛容であるということは非常に重要であり、これは将来的なひきこもり防止の観点からも非常に重要である。こうした観点から学校を変えていくことも必要だろう。

また、不登校になった子どもたちへの支援も当然必要である。子どもの特性やエネルギー状態によって、行ける場所は異なる。多様な居場所を用意する必要があると思う。草潤中学校や校内フリースペース、オンラインを活用した支援等が

用意されているのはとてもよいことであり、加えて、学校の雰囲気や全く感じさせないフリースクールのような場所をつくってもよいと思う。

### ○横山委員

不登校であった当時の、また現在の棚園さんとして、学校はどうあってほしいか教えていただけないか。

### ○棚園氏

私は、学校は学校としてこれまで通りあればよいと思っている。その代わり、草潤中学校や校内フリースペース、オンライン、あるいは民間フリースクールといった、多様な行き場所、居場所があるとよいと思う。学校もその中の1つの選択肢という形がよいのではないか。私と同じように、現在不登校の子どもたちも、学校にいけないことを負い目に感じてしまっていることだと思うが、学校に行けないことを残念に思わないような世界になるとよいと思っている。

また、不登校の子を持つ親同士のつながりも非常に大事である。子どものために様々な情報を調べるのだが、周りにある意味同じ境遇の仲間がいない場合は、情報共有や悩みを打ち明けられず、孤独を抱えてしまうと思う。不登校のお子さんを持つ親の会に関わったことがあったのだが、そこで文化祭をすることになった。絵を描いたり、カラオケをしたりしたのだが、そこには不登校のお子さんも来ていた。その中で、子どもたちは自然に友達になり、親も大勢の仲間がいることに勇気づけられているように感じた。こうした親同士のつながりができた事で、家でもやもやすする時間が減り、不登校を前向きに捉えられるようになった頃に、気が付いたら子どもたちが学校に通うようになったという話を幾つも聞いた。子ども本人への支援だけでなく、親同士がつながることへの支援も必要だと思う。

### ○横山委員

事務局資料の中に、小学校であれば5年生、中学校であれば2年生で不登校児童生徒が大きく増えるとある。加藤委員に伺いたいのが、これは何が原因だと考えられるか。

## ○加藤委員

人というのは、これまでの様々な経験の積み重ねの中で、物事の捉え方等が形づくられていくものである。小学校の3、4年生は、一つのキーになる時期ではある。この時期に、自分と他人、あるいは自分と世界の間を把握できるようになるのだが、自分の劣っている部分に目が行ってしまうことや、仲間づくりの失敗がトラウマとなって歯車が狂いだし、5年生で行けなくなるという構図ではないか。ただ、振り返ってみると、その兆候はさらに前から存在している場合が多い。場合によっては、幼児期にその兆候が出ている場合もある。幼稚園や保育園と、小学校の文化の違いによる、小学1、2年生でのネガティブな体験も要因の一つだ。特に、過剰適応する子どもや完璧主義の子どもが学校を辛いと感じがちである。こうした子どもたちに学校を辛いところと感じさせないためには、失敗してもよいということを小さなころから教えていくことが大事であり、学校はそれを許容する場でなければならない。特に、担任の教員の考え方は子どもたちの心理状態に大きな影響を与える。

中学2年生の場合は、中学校に過剰適応した結果、2年生でエネルギーが切れてしまったのではないかと考える。学校の授業、部活、塾が終わって家に帰ると毎日22時を過ぎるような生活をしている子どももいる。これでは、事務局資料にあった身体の不調につながるだろうし、頑張りすぎることで、心の不調にもつながるだろう。これはまさしく過労状態である。ただ、何か起こったからその学年に特別に手を打つのではなく、先ほど申し上げたように、過去からの積み重ねが大事である。

また、子どもたちの中には、診察室でしか語ってくれない子もいる。また、医

療現場では、そのお子さんを継続的に診ていくので、特性や経緯、対応方法について、学校が持っていない情報を多く持っている場合がある。医療と教育が連携し、こうした情報を学校へフィードバックすることも非常に重要ではないかと考えている。

## ○横山委員

棚園さんの講演や加藤委員のご意見、それから私の思いも併せると、不登校の要因は本当に様々であるので、荒っぽい言い方だが、関係機関が総がかりで取り組んでいくしかないと思う。

その中でも、学校は様々な課題を抱えており、それを改善していかなければならないが、私は学校が子どもの一番の居場所であるべきだと思っている。

棚園さんは、やりたいときにやればよいというようなことをおっしゃられた。それを踏まえると、まずは子どもが楽しさを追求できる、自分のやりたいことができる場所が学校の中に確保されていることが必要だと思う。また、友達という言葉が何度か出てきたと思うが、心を許せる友道をどれだけつくれるか重要である。事務局資料にも、学校に行きづらいことを相談した相手のうち、友達の割合はかなり低かった。相談できる、心許せる友道が増えるような工夫をしていくことも必要である。

## ○岡本委員

以前、青年会議所の活動で、子どもたち延べ約1,000人に対して授業をした際、当時の松川岐阜県教育委員会教育長から、学校以外で子どもたちの活躍できる場をつくってもらえてありがたいと言っていた。また、参加していただいた先生からも、普段おとなしい子が急にリーダーシップを発揮してくれたとか、いつもと違う子どもたちの姿がみられたと言ってもらえた。私が子どもの頃は、勉強ができなくても、何か得意なことがあると尊敬の目を向けてもらえたものだ



が、最近の学校の様子を聞いていると、前提として勉強ができて成績がよくないと、他のことができて目と目といった風潮があるようだ。好きなことや得意なことは人それぞれであり、それを認め、評価してもらえるような環境があるとよいと思う。まずは、学校をそういった多様な子どもたちを受け入れられる環境にすべきだと思うし、学校が難しいのであれば、草潤中学校やオンライン支援のような、学校とは違った形の受け皿があると、子どもたちが自己肯定感を損なわずに済むのではないかと思う。

また、草潤中学校の卒業生の中には、普通科の高校に進学した生徒もいる。苦しい時期を乗り越えていく場面も必要だと思う。私が経営する会社に通信制高校出身の社員が今春入社した。最初は毎日出勤してくるか心配していたのだが、ある時、忙しさから彼を頼り、終わった後にありがとうと言って苦勞を分かち合ったことがあった。それを機に彼は社内でも馴染み、今では出勤してくるか心配するようなレベルではなくなった。小、中、高とうまくいかなかったこともあっただろうが、おそらく彼の中で一つ山を越えたのだと思う。誰しも、そうしたタイミングがどこかで来るのだと思う。我々としては、そうした場を提供する必要があるし、そうした機会を意識して見つけていかなければならないと思う。

## ○伊藤委員

美濃市の学校選択制導入や各務原市の小規模特認校制導入、高山市の不登校特例教室設置などのニュースを拝見した。そのどれもが不登校対策という訳ではないだろうが、多様な学びの場、選択肢を用意するのが我々の役割ではないかと思う。私は、学校へ行く意味はとても大きいと思っている。私の子どもの友人の話だが、昨年夏、通っていた私立中学校の友人とのトラブルで、地元の公立中学校へ転校したことがあった。転校するまではとてもつらそうな様子であったが、転校先の学校で快く受け入れていただけたようで、短期間で見違えるほど元気になった。今は進学した高校で充実した学校生活を送っている。現時点でも、こう

した事由による市立公立中学校間の転校は可能なのだが、転校に至るまでのハードルが高く、なお且つそれがしっかり周知されているとは言い難い状況だ。他の自治体の取組をそのまま取り入れることは難しいだろうが、まずは転校に関する既存の制度の周知と転校に至るまでのハードルを下げることに努める必要がある。また、こうした転校に関することや子どもたちの思いを受け止めるための相談窓口も必要だろう。

今年から私の子どもが高校生になったのだが、中学校の頃と比べ、羽を伸ばして生き生きしているように感じる。それは、自由な雰囲気があることが理由ではないかと思う。中学校では、内申点へのプレッシャーや多くのルール、同調圧力、友人との関係等、学校生活を送るために多くのエネルギーを要する。自由であるということは、裏を返せば自己責任ということなのだが、自分で選択できる機会の増加が、この自由な雰囲気につながっているのだと思う。義務教育かそうでないかの違いは大きいかもしれないが、こうした高校のよいところを取り入れていけるとよいと思う。

## ○水川教育長

岐阜市には約3万人の小中学生がいるが、そのうちの1,126名が不登校である。これは、400人規模の学校約3校分に相当するものであり、これだけの数の子どもたちが、かけがえのないこの時期を苦しみながら過ごしていることは、大変な事態であると捉えている。全国学力・学習状況調査で学校の教員が答える不登校の要因と、不登校児童生徒の実態把握に関する調査で子どもたちが答える不登校のきっかけが異なっていることからわかるように、不登校の要因やメカニズムについてエビデンスに基づきしっかりと理解する必要がある。そのためには、これまで以上に多くの子どもたちの声に耳を傾けなければならないと思っている。そして、それを施策に反映していくことが必要だ。

棚園さんの講演をお聴きして、居場所があること、認めてくれる大人や分かり合える仲間がいることは、子どもにとって必須なことだと改めて感じた。加えて、自分で選択できる機会も必要だ。草潤中学校で得られた知見をすべての学校へ反映していかなければならない。棚園さんに伺いたいのだが、子どもたちが自ら選択できるプログラムとして、学校にはどういったものがあるとよいだろうか。学校において子どもたちが選択する機会は限られるのだが、部活動の地域移行によってさらにその機会は減少すると考えている。また、この子は絵が好き、この子は野球のときは人が変わったように頑張るといった、勉強以外の一面を学校で見せる機会も減少するだろう。

## ○棚園氏

草潤中学校の校舎4階の一室でプロのイラストレーターの方が作業しており、それは子どもたちにとってとてもよいことだと思った。実際に作業している姿を見ることができたりコミュニケーションをとることができるからだ。イラストレーターに限らず、その道のプロから直接話を聞ける機会があるとよい。子どもたちにとって、自分と世界がつながっていることを実感できる機会は、とてもワクワクするものである。それを学校の中で実現できるとよいと思う。子どもたちが学校の中で関わる大人は先生ばかりだ。外の世界の大人と学校の中で関わったのなら、当時の私はうれしかったと思う。

## ○水川教育長

今年度から、ぎふMIRAI 's という取組を始めた。岐阜市の自然や歴史、伝統、文化のみならず、例えば川と共に生きる川漁師の方の話を直接聞く機会を設ける等、まさに生の人と出会うことによって、子どもたち自身の人生観を少しずつ形づくっていかねばと考えているのだが、それについてどう思われるか。

## ○棚園氏

とても良い取組だと思う。ある大人の生き方に子ども全員が感化されるわけではないので、多様な大人と出会う機会があるとよいと思う。

## ○柴橋市長

以前、岐阜清流中学校の子どもたちに向けて話をしたことがあるのだが、書類を整理するタイミングで、改めて子どもたちが書いた感想文を読み直した。私はそこで「我々の人生というのは、自らの選択と行動の連続である。今も自分で考えて、自分で選択して行動しているし、これからもそうだ。」という話をしたのだが、子どもたちは、「そのようなことを考えたことがなかった。その考え方は自分にピタッときた。自分でも様々なことをしっかり自分で考えて選択できるようになりたい。」といったことを書いてくれていた。先ほど加藤委員もおっしゃっていたが、自分で決められないという抑圧に対して、人は辛さを感じるものである。棚園さんの不登校のきっかけとなった出来事もまさにそうだと思う。子どもたちは子どもたちなりに様々なことを考えて選択しているのだから、それを受容するのか、あるいは例えば今はそのタイミングではないよねといって思いを共有するのか、選択する機会毎にしっかりと対話することで、子どもたちが学ぶ機会となるのである。問答無用で、あれをやりなさい、これをやりなさい、それはやっては駄目だといったものは、子どもたちにとって何の学びにもならないという感じたとても大きな機会であった。

先ほど伊藤委員が同調圧力という表現を使用されたが、私は集団管理型教育のことをあまり好きではない。今の時代の学校では、自分で考えて、自分なりに解を予想し、その解を探す力が必要だ。その解が正解かどうかは関係ない。学校だけでなく、現に社会でもそのような力がなければ、変化の激しい今の時代は、とてもではないが生きていけない。学校教育の中で子どもたちがこうした力をつける機会を多くつくっていくかなければならないと受け止めている。

棚園さんに伺いたいですが、本日の講演では、鳥山先生や友人、先生等、人が大きなキーワードとなっていたと思うが、学校空間が影響を与えたということはあったのだろうか。

### ○棚園氏

私は学校で求められる、周囲と同じペースで同じ行動をすることが苦手であったが、フリースクールや大学では自分のリズムで過ごすことができた。自分のリズムで過ごせたことで、楽しさといったものをしっかり捉えることができたと思っている。

### ○柴橋市長

リズムという言葉があったが、例えばプールで泳ぐ際に息継ぎがうまくいかないといった感じか。

### ○棚園氏

悪気はないのだが、遠足や修学旅行では、自分だけ違う方向に行ってしまうような子どもだった。こうした部分は、自分でもまずいと思い、大人に近づくにつれて矯正してきた。子どもの頃は、それが全くうまくできなくて、なんて難しい世界だと思っていた。

### ○柴橋市長

加藤委員はよく御存じだと思うが、今の棚園さんのお話からも分かるように、子どもたちは本当に多様だ。翻って、公教育は制度や仕組み、施設、人的配置等、様々なものがある程度決められているのだが、そこにどのようにして変動性を持たせるかが非常に大事なところだと思う。草潤中学校はその1つだ。本日の皆さんのご提案を受けて、教育長も様々に考えるところがあると思う。教育委員会に

おいて引き続き御議論いただきながら、我々としても一丸となって子どもたちが  
安心できる環境をつくっていきたい。

---

(15時30分閉会)